

裾花川扇状地遺跡群

栗田城跡(4)

—栗田ふれあい会館建設に伴う発掘調査報告書—

2014・3

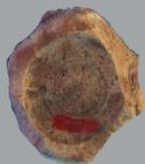
長野市教育委員会



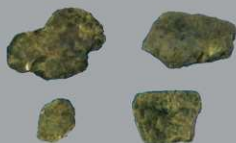
小銅仏(善光寺式阿弥陀仏)



龍泉窯青磁算木文香炉



白磁皿高台内朱墨痕



雲母片

序

埋蔵文化財は、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産です。肥沃な善光寺平の中央部に位置する長野市においては、その歴史の積み重ねを物語るように、現時点で1,000箇所を超える数多くの遺跡が周知されています。





本書は、中世城館跡である栗田城跡の発掘調査に関する報告書です。隣接する日吉神社の社殿は栗田城の土塁の跡に築かれたと伝えられ、古い来歴を有した一帯に位置しております。今回の調査により、中世栗田氏の勢力を物語る成果が得られました。地域史解明の一助として多くの皆様にこの調査成果をご活用いただければ、まことに幸いに存じます。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました事業関係者各位及び、発掘作業に際して多大なご尽力をいただきました地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、栗田ふれあい会館建設工事を起因とし、記録保存を目的として平成25年5月30日から6月24日までの間に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、起因となった公民館建設事業を主管する栗田町内会と、埋蔵文化財保護を担当する教育委員会埋蔵文化財センターとが協議調整し、発掘調査に関する直接の業務は埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査の所在地は、旧栗田公民館（長野市栗田480番地2）である。敷地全域を埋蔵文化財保護対象とし、開発にかかる建物建設部分約190㎡を発掘調査の実施対象範囲とした。
- 4 中世城館として周知される「栗田城」が遺跡範囲となることから、居館跡中心部の字名を冠して遺跡名を「栗田城跡」と命名した。遺跡略記号は「SKCF」と表記し、出土遺物及び調査に係る諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 本書に掲載した遺物番号はすべて通番とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 6 本書の遺構測量図に示した座標は、平面直角座標系の第Ⅱ系座標値（日本測地系2000）に基づく。また図中で示す方位はすべて座標北である。遺構測量にあたっては株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 7 本書図版に使用したトーン及び略称は以下の通りである。
 柱痕・漆  礫・炭化物  柱の当り・磨痕  朱墨
青磁-青 白磁-白 青白磁-青白 中国産陶磁器-中国 瀬戸・美濃焼-瀬 珠洲焼-珠 山茶碗-山
- 8 本書の執筆は、Iは飯島哲也、VIは株式会社吉田生物研究所、その他は田中曉徳が分担した。
- 9 石材鑑定は戸隠地質化石博物館田辺智隆氏、石材及び鉱物鑑定は信州新町化石博物館晶山幸司氏に依頼した。また、金属製品のX線撮影は、長野県立歴史館白沢勝彦氏に依頼した。
- 10 発掘調査の実施に際し、事業委託者である栗田区町内会におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き絶大なご協力を賜った。また発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご指導・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略 五十音順）
相羽重徳 青沼道夫 市川隆之 牛山佳幸 尾見智志 片山 勤 倉沢正幸 白沢勝彦 竹村裕夫 中里栄志 堀 脇 水澤幸一 上田市立博物館 栗田区町内会 長野県立歴史館 日吉神社

目次

序・例言	
I 調査経過	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
3 調査の体制	2
II 遺跡と環境	2
III 調査概要	5
IV 遺構	6
V 遺物	7
VI 自然化学分析	10
VII まとめ	12
引用参考文献	
図版	
抄録	

挿図目次

図1 周辺の遺跡と地理的環境	3	図3 基本層序	6
図2 栗田城縄張想定図	4	図4 栗田城跡内郭部分発掘調査位置図	13

表目次

表1 土器・陶磁器観察表	15	表2 石製品・金属製品観察表	18
--------------	----	----------------	----

図版目次

図面図版	写真図版
図版1 全体図	図版10 遺跡全景
図版2 遺構個別図(1)	図版11 壁断面
図版3 遺構個別図(2)	図版12 土坑
図版4 遺構個別図(3)	図版13 土坑・ピット・遺物出土状況
図版5 遺物(1)	図版14 遺物(1)
図版6 遺物(2)	図版15 遺物(2)
図版7 遺物(3)	図版16 遺物(3)
図版8 遺物(4)	図版17 遺物(4)
図版9 遺物(5)	

I 調査経過

1 調査に至る経緯

栗田公民館の建替え事業に伴う埋蔵文化財保護協議は平成22年度に遡る。地元からの依頼により日吉神社の社務所において出土物の展示会を開催した折、開発計画の存在を聞くことができた。その後、平成22年12月8日に設計コンサルを担当する株式会社グローバル企画設計より電話とファックスによる問い合わせがあり、周知の埋蔵文化財包蔵地である「栗田城跡」の範囲内であること、工事着手前に保護措置が必要になること等を説明した。その約1年後、平成23年12月12日に栗田町内会会長である堀脇氏が長野市埋蔵文化財センター（以下、



旧栗田公民館

当センター)に来所され、工事着工が平成25年度になることと、発掘調査に関する国の補助金制度の有無について説明を求められた。特に国庫補助については、同21日に長野県教育委員会（以下、県教委）に問い合わせたところ、基本的に個人住宅や零細企業のみが対象であり、栗田区のような地域公民館は零細企業と判断できる可能性があるものの現時点で「零細」の基準を県教委が設定していないため「対象外」との回答であり、その旨伝達した。

その後、いくつかの保護協議を経て、公民館既存建物の解体工事を請け負う業者が決定し、文化財保護法（以下、法）第93条の規定に基づく届出を依頼するとともに、解体工事の施工中に試掘調査を実施して埋蔵文化財の包蔵状況を確認したい旨を伝えた。これを受けて平成24年11月26日付で法第93条の規定に基づく届出が栗田町内会会長名で提出され、同29日付24埋第423号にて長野市教育委員会（以下、市教委）から県教委あてに進達した。県教委からは平成25年1月16日付24教文第7-729号にて工事立会いの措置が通知された。試掘調査は基礎撤去直後の平成25年2月13日に実施した。区域内の任意の場所2箇所にトレンチを設定し、現地表下約55cm付近に中世の土器片を含む遺物包含層の堆積を確認し、その直下にてピット状の遺構らしき人為的な掘りこみも確認した。この結果、埋蔵文化財が良好に残存していることが判明し、本体工事である公民館建設工事の際には事前に記録保存を目的とした発掘調査が必要となる旨、平成25年2月18日付24埋第604号にて回答している。そして、平成25年2月20日付で本体工事に伴う法第93条の規定に基づく届出を受理し、同日付で県教委あてに進達し、県教委からは平成25年3月26日付24教文第7-921号にて発掘調査の措置が通達された。その後、具体的な保護協議を重ねる中で、5月23日付で「発掘調査依頼書」と「土地所有者の承諾書」を受領し、5月27日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、5月30日から6月24日まで26日間、発掘調査を実施した。地元の栗田まちづくり協議会歴史文化研究会からの依頼により、発掘調査がほぼ終了した6月22日に開催された報告会で発掘調査成果の概略を説明した。また、平成26年1月11日から13日の間、竣工した栗田ふれあい会館（栗田公民館）において、出土品の展示会も開催した。

平成26年3月20日付で埋蔵文化財発掘調査委託契約書の変更契約を締結するとともに委託費の決算を行い、その後実績報告書を提出し、すべての委託業務を完了した。

2 調査の経過

5月30日より、調査開始。バックホーにより表土掘削を行う。遺構確認面まで掘削した段階で、南に礫層が確認された。6月3日に、人力による遺構精査を行い、遺構を検出したところ、遺構は北半に集中した。翌日より遺構掘削を開始し、SK01より掘削を開始し、周辺のピットについても順次掘削をしていった。6月10日までに北半の遺構掘削を概ね終了した。調査区中央付近の礫層との境界付近で焼土層が部分的に確認されたため、調査区南半の礫層を除去し、東トレンチを掘削して下層の状況を確認した。6月12日、全景撮影及び遺構測量を行う。6月13日、既に調査区南半に下層に焼土層が確認されていたため、バックホーにより調査区南半をさらに掘削した。下層焼土層より小銅仏が出土した。2次検出面において遺構を確認し、遺構掘削に入る。6月21日、全景撮影及び遺構測量を行い、6月24日に器材を撤収して、調査を終了した。

3 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治
調査機関	文化財課	課長	青木和明
	埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫
	庶務担当	係長	河口英明
		職員	大竹千春
	調査担当	係長	飯島哲也
		主査	小林和子
		主事	塚原秀之
		専門員	遠藤恵実子 日下恵一 篠井ちひろ 高田亜紀子
		〃	田中曉穂 平林大樹 柳生俊樹
調査員	青木善子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子		
発掘作業員	赤松悟 加藤英次 鳥崎藍 竹村修一 竹村英人 竹村道夫 玉井なおこ 中田芳美 中村寿雄		
	西澤啓子 松本葉留奈 三澤由夏 峯村茂治		
整理作業員	清水さゆり 関崎文子 西尾千枝 待井かおる 三好明子		
遺構測量業務委託	株式会社写真測図研究所		
自然化学分析・保存処理	株式会社吉田生物研究所		

II 遺跡と環境

栗田城跡が位置する裾花川扇状地は善光寺平の西部山地である旭山北嶺里鳥付近を扇頂として東から南に広がる。裾花川は近世初頭に南を東流する早川へ合流するよう南下するルートに変更されたが、中世段階までは扇頂部で多くの小河川に分流して栗田をはじめとした裾花川扇状地を潤していた(図1)。栗田周辺は裾花川による洪水堆積により形成された微高地と裾花川から分流した小河川がつくる低地が分布し、中世までは水田地帯であった。近世に至り、乾燥化が進み、桑などの畑作地となっていく。栗田城はその地形の高低差を利用して築かれた城館であり、北の古川と南の前堰を引水して堀を形成した複郭式城館と想定されてきた(図2)。規模は外

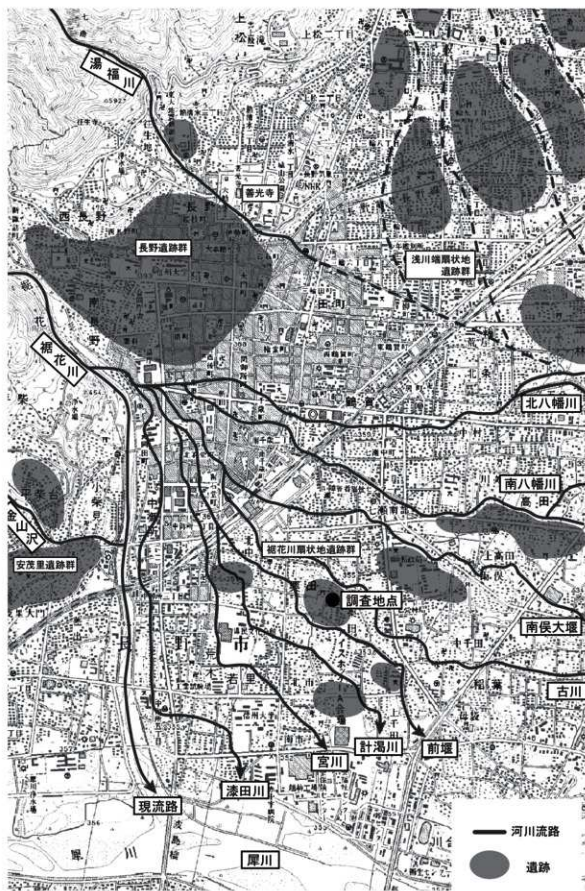


図1 周辺の遺跡と地理的環境 (1/25,000)

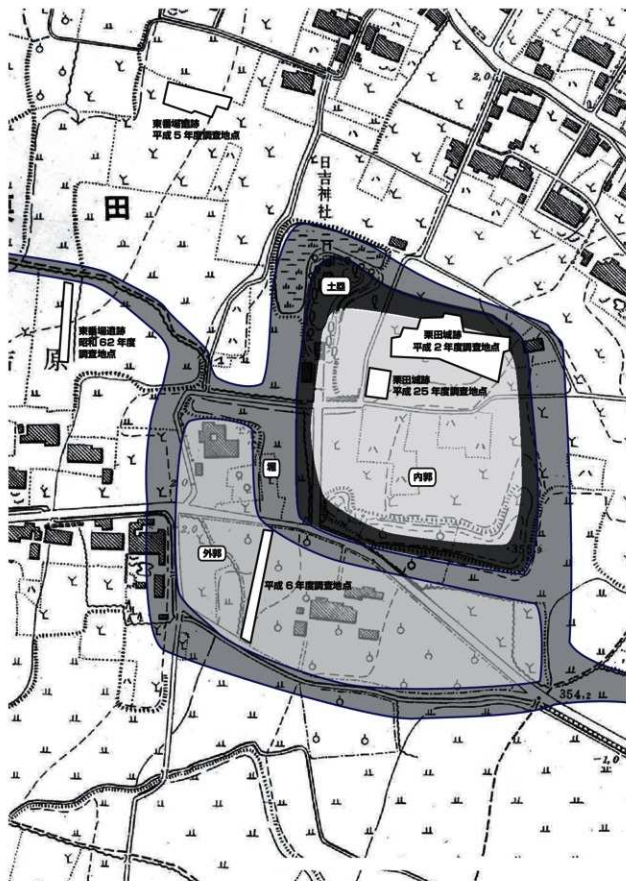


図2 東田城縄張想定図 (1/2,000、大正15年測量・昭和27年修正長野市地形図を改変)

郭が東西 709 m、南北 1,090 m、内郭は約 220 m 四方、長野市内では最大級の中世城館とされる。内郭北西隅の土塁部分には現・水内惣社日吉神社の社殿が建っている。「応安三年十月藤井下野入道代上遠野政行軍忠状」には応安 3 年（1370）10 月 4 日に栗田城を攻撃し、翌日は西木戸で戦ったと記載される。信濃守護関東管領上杉朝房の指示による攻撃とされ、栗田城の初見史料である。

栗田氏は、中世の北信濃の国人で、鎌倉時代初めに更級郡村上御厨（坂城町）の国人領主である村上氏から水内郡栗田郷に進出した者が姓に地名を冠したものとされる。公領・栗田郷を拠点としたとされ、治承 4 年（1180）横田河原合戦に「栗田寺別当大法師範覚」（寛覚）が参加したのが栗田氏の史料上の初見である。ここに表れる「栗田寺」をもって栗田城跡が栗田寺であったとの考え方もあるが、『水戸栗田系図』寛覚傍注「栗田禅師初て信濃国栗田郷二居住ス依テ本名村上止在名号栗田、回国兼戸隠明神別当」に「戸隠明神別当」と表記され、栗田寺が戸隠顕光寺別当を指している可能性もある。現在も善光寺東門に位置する寛慶寺は明応 5 年（1496）栗田寛慶の子寛高が父の命により栗田寺を移転し、天正 15（1587）に寛慶寺と改名したとされる。建治元年（1275）には鎌倉幕府の御家人として「栗田太郎跡」が見える。栗田氏については戸隠顕光寺別当の栗田氏を山栗田、善光寺別当を里栗田と称されており、里栗田の初見は「諏訪御符礼古書」文明 3 年（1471）に「栗田国俊」と記されるものである。しかし戦国期以前の善光寺別当に関する栗田氏の動向について詳細は不明である。戦国期の栗田氏の勢力を示す史料として齊藤秀平所蔵文書中の「上杉家年寄奉書写」には「井上・海野・島津・栗田、其外信州衆相談、自関口可乱入之由、方々注進到来、然者、自上田口も定内徒可出張候歟」とある。永正 6 年（1509）、越後守護上杉定実救援のため、信州衆と称される信濃の国人が越後への乱入を相談をしたことが記載され、この時期栗田氏は上杉定実・長尾為景の下にいたことが知られる。ここに表れることをもって当該期の栗田氏が一定の勢力を有していたと考えられている（小林 1982）。またこの戦いに前後して善光寺平において千曲川の河西を島津氏・栗田氏が掌握したと考えられている（井原 2009）。河東には同じく善光寺平の国人層である高梨氏がおり、室町期を通じて善光寺をめぐる栗田氏と対立関係にあった。このため高梨氏は領地である中野に河東善光寺を建立し、善光寺仏も移されたとの伝承が残っている（井原 2009）。弘治元年（1555）上杉陣から武田氏側に従うようになった栗田氏は上杉謙信から攻撃されることとなる。この際、『妙法寺記』に「善光寺ノ堂主栗田殿ハ旭ノ城ニ御座候」とあり、栗田氏は善光寺の西に位置する旭山に籠城したことがわかる。同年、別当である栗田鶴寿が武田氏に従い甲斐国に善光寺仏を移すが、まず佐久郡鉢津村に移り、その後永禄元年（1558）に甲斐国に移った。甲斐善光寺はその後永禄 8 年（1566）に建立された。この後、近世に至るまで善光寺周辺からは活気が消えていたと言われる。

Ⅲ 調査概要

本調査においては試掘成果及び調査区の北方に位置する平成 2 年度調査区の調査成果に基づき遺構確認面を設定した。北半の遺構を検出したものの、南半については東西に延びる赤褐色の焼土の帯とその南は礫で埋め尽くされた状況であった。焼土の広がりを確認するため、礫層除去及び東壁に沿ってトレンチを掘削し、下層の状況を確認すると、さらに下層に焼土層が存在することが判明し、石臼等の遺物も出土した。この結果に基づき、調査区南半をさらに掘削し、下層焼土層の下を 2 次面として調査を継続した。南半の遺構の覆土のほとんどは下層焼土層・包含層であり、下層包含層・下層焼土層・粘土層が火災を契機にした造成土層であったと考えられる（図 3）。遺物においても造成土層出土遺物と遺構出土遺物は接合関係にあり、2 次面において南下段に遺構が形成さ

れたものの、15世紀前半に火災により焼失し、南下段をその際の焼土や炭化物などで埋め、改めて全体の造成を行ったと見られる。よって北上段は新しい遺構、南下段の下層焼土層下は古い遺構と捉えられる。ただし、栗田城跡の過去の調査および今回の調査成果からは15世紀前半代より新しい年代は導き出せず、造成より時を置かず上層の遺構は廃絶した可能性が高い。

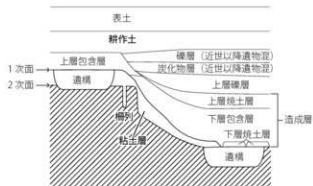


図3 基本層序

IV 遺構

SK01 方形の掘りこみに北に長方形の張り出しがあるL字形堅穴建物である。長軸3.81m、短軸2.05m、深さ15cm程度で壁周にビットが10基巡り、側柱をもつ構造であったと考えられる。堅穴建物は半地下式の方形基調の柱穴建ちの建物であり、東日本を中心に12世紀後半～16世紀代に見られる。本調査において検出された遺構は浪岡城跡の例に時期的にも、構造的にも近似する。堅穴建物の用途は焼土の検出から居住施設であると立証される場合もあるが、大半は倉庫とされるか、用途不明となっている。本調査の堅穴建物も用途は解明できていない。SK02 SK01の南辺を壊すように構築された不整形土坑。長軸79.7cm 短軸64.2cm。土器皿などが出土した。

SK03 SK01・04を削平して構築された不整形土坑。長軸1.60m 短軸1.27mの土坑である。

SK04 SK01の中に構築された略方形の土坑。当初二つの土坑として調査したが、1つの土坑であると結論した。

SK06・09 SK06は調査区南端に掘削された堅穴建物である。南西-北東に軸があり、長軸3.52m、短軸2.40m、深さ約18cmの堅穴建物である。SK09に中央を壊されている。SK09は長軸1.79m、短軸1.32mの長円形で、SK09からは石臼や礫が出土した。また漆器碗と見られる破片が確認されたが、木質部は腐食により消滅し、漆膜が残されているのみであった。状況からみて廃棄土坑の可能性が高い。

SK07 調査区中央に造成された段の境に位置する方形土坑である。長軸1.37m、短軸1.06m、深さ30cmである。SA01P28に切られている。2次面で構築された遺構で上面を1次面造成土が覆っている。土坑内には炭化物が充填しており、調査区内で最も遺物のまとまりがよい遺構である。遺物の多くは被熱している。火災後に炭化物や陶磁器等を廃棄したものと推定される。

SK08 調査区東壁にかかる土坑で堅穴建物の可能性がある。長軸2.72m、残存長1.91mで方位はSK06と同一と見られる。深さ約30cmである。下層焼土層の下で確認された。2次面の遺構である。

SK10 SK07・SA01の南に位置する。長軸1.77m、短軸1.15mの卵形で深度が浅い。

SK11 調査区南東隅に位置する。ビットとSK08に切られる。大半が調査区外のため、詳細は不明である。残存長は南北51.5cm、東西72cmである。

ST01 調査区南西端に位置する。桁行3間×梁行1間、柱間は桁行が77.2～141cm、梁行が207cmとなる掘立柱建物である。一部のビットでは柱の当りが確認された。中世の掘立柱建物の構造を鑑みるに、さらに南、調査区外に柱穴が続く可能性もある。焼土が最もよく検出された範囲である。SA01とは方位が異なるが、下層焼

土層の下で確認されたため2次面の遺構と考えられる。

SA01 調査区中央に造成された段の上段に東西方向に延びる櫓列である。両端は調査区外に続くと推測され、調査区内だけでも13本の柱を持つ。柱間は81.1～110cmで平均90.8cm、およそ半間になる。深さは30cm～50cm程度で深いピットが多い。2次面の遺構である。

SD01 東西方向の溝で規模が小さい。長さ33m、幅47.3cm

ピット 調査区内のピットは柱の当りや柱痕が確認されたものがあり、建物や櫓列になるものとみられる。P01は底面に根固め石が敷かれている。P26・28・29・31・32・44・48は柱痕が確認された。P26・43は径12cmの柱と考えられ、櫓列であるために比較的細い柱材を用いたと想定される。P62は柱を抜いた後に焼土や壁土などで埋められた様子が看取される。P39・48・62は柱の当りが観察された。P52は調査区南壁に切られるため全体が分からないが、ピットとしては遺物が多いため、調査区外へ続く大きい遺構の一部である可能性が高い。

V 遺物

調査区内から出土した遺物量は種別に、土器皿8,170.11g、陶磁器946.18g、青磁1,231.22g、白磁285.34g、青白磁49.77g、中国産陶器612g、陶器では古瀬戸1,499.15g、珠洲2,231.61g、在地須恵器218.98g、常滑1,591.75g、越前859.66g、山茶碗27.69g、瓦器は898.16g、内耳鍋266.05g、壁土1,079.16g、石臼38,120g、石鉢6,930g、釘30本199.69g、砥石1点、小銅仏1体、銅碗1点、北宋銭1枚などである。

下層焼土層からは方規の破片が出土した。SK07・SK11からも同一個体が出土し、被熱により破砕したと考えられる。出土陶磁器・土器については、貿易陶磁器は横田・森田編年、水澤編年、瀬戸・美濃系陶器は藤澤編年、珠洲焼は吉岡編年、瓦器は水澤編年にそれぞれ依拠した。掲載外遺物の詳細は以下のとおりである。

SK01 土器皿、龍泉窯系青磁碗体部小片無文、壁土。

SK01P1・8 土器皿片。

SK03 土器皿、綠色軸を外面に施軸した陶器壺甕類の肩部片、壁土。龍泉窯系青磁碗小片無文。

SK04 土器皿、古瀬戸灰軸陶器片、白磁皿片。

SK06 土器皿、古瀬戸陶器片、龍泉窯系青磁碗破片、時期が下る線描蓮弁文のものが1片含まれ、SK09の可能性がある。内耳鍋底部片は内面にスガが見られる。瓦器、茶白片2,500g、石鉢底部片2,230g。

SK07 長さ10cm・厚さ6cmの壁土。土器皿、陶器片、瓦器、白磁皿片。

SK08 龍泉窯系青磁碗、土器皿、陶器片。

SK10 龍泉窯系青磁碗高台片、土器皿。

SK11 龍泉窯系青磁片、土器皿、陶器壺甕類片。

SA01 P26 端反白磁皿、壁土、土器皿小片。

SA01 P28 土器皿、青磁小片、壁土。

SA01 P29 土器皿、壁土。

SA01 P30 内耳鍋胴部片。

ST01 P51 土器皿、古瀬戸小片。

- ST01 P58 土器皿片、龍泉窯系青磁碗体部小片無文、陶器片。
- P07・10・12・13・24・33・36・38・50・53・59・60・72・69 土器皿小片が出土した。
- P25 土器皿小片、白磁皿小片。白磁皿は体部片のため年代は不詳。
- P37 土器皿小片。
- P52 遺物出土量は多く、土器皿が比重を占める。古瀬戸茶壺・中国産壺・珠洲羹・常滑羹・内耳鍋小片。
- P63 土器皿片、龍泉窯系青磁碗体部片が出土。青磁は無文である。
- P64 土器皿小片、白磁皿小片が出土。白磁皿は体部片のため年代は不詳。
- P65 土器皿・珠洲焼・常滑焼が出土したが小片のため器種が特定できない。
- P68 土器皿小片。在地系須恵器片口鉢小片。
- P70 青磁端反無文碗が出土。
- P71 中国産壺片が出土したが南半全体に出土する 37 の同一個体と考えられる。

貿易陶磁

青磁は無文端反碗が大半を占めており、14 世紀代～15 世紀前半、横田Ⅳ類に属する。このほか算木文香炉は若干時期が早く、13 世紀後半～14 世紀後半、貼花文香炉についても 14 世紀代に分類される。食膳具である碗とは異なり、香炉のような威信財とされる製品は長期にわたり所持されることがほとんどであるため、共存遺物のなかでは年代が上がる傾向がある。青白磁渦巻文版は平成 2 年度調査でも出土している。白磁皿は森田Ⅳ類、15 世紀代である。なお 13 世紀後半～14 世紀前半の白磁口禿皿が 1 点のみ確認された。天目碗は胎土が灰色を呈し、天目碗を生産する瀬戸・美濃系の胎土とは異なり、釉薬を 2 度掛けしている。古瀬戸後期Ⅰ～Ⅲ期のモデルとなった器形であり、14 世紀後半～15 世紀半ばに属し、大量に流通する（水澤 2006）。鉄軸・錯軸を施した玉縁口縁の壺は具体的な産地は不明だが、胎土と器形から中国系の陶器と考えられる。

国産陶器・土器類

瀬戸・美濃焼は古瀬戸後期Ⅰ～Ⅳ古の範疇に入り、香炉や花瓶・仏用具・水注など特殊な器種がみられる。珠洲焼はあまり出土せず、壺（Ⅳ・Ⅴ期）、片口鉢（ⅣⅠ期）を掲載した。このほか山茶碗が出土した。

瓦器風炉を 4 点掲載した。この他猫脚状の脚部も出土している。すべて造成土層及び 2 次面からの出土で、風炉Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類に分類される（水澤 1999・2001）。下町・坊城遺跡 C 地点（新潟県胎内市）においては遺物共存関係から 15 世紀前半の廃棄年代が与えられているので、本遺跡出土の風炉についても、同様の年代と捉えられる。

土器皿は 32・48 のように白色・精良の胎土を持ち、端反の器形は、北陸搬入品の可能性がある。32 は口縁内外に朱墨の付着が見られた。このほか手づくね皿はごく少量で、すべてロクロ成形・糸切の皿となる。本調査の遺物は特殊器種を除き、ほぼ時期差がなく 15 世紀前半代と判断される。土器皿についても同時期のものと考えられ、その中でも器形や整形により分類が可能である。全体として内湾して立上る傾向は共通するものの、1 類～内湾して立ち上がるが、底部と体部の境に強い横ナデを施すもの（5・11・89 など）、2 類～内湾して立ち上り、そのまま直線的に開く器形で、比較的薄手であるもの（15・16・47）、3 類～器高が低く、小形で直線的に開く器形（36・73・76 など）である。既に中野市の高梨氏館跡発掘調査報告書において土器皿の分類編年が行われているが（中野市 1993）、本報告 1・2 類は高梨氏館跡Ⅱ類に、3 類はⅢ類に該当すると考えられ、年代も 15 世紀代と齟齬はないようである。しかし器壁の厚さや器高など多様なバリエーションが存在するため、土

器皿の分類編年は今後の課題である。

その他

石製品では、石臼は掲載点数10点である。茶臼は7点を数え、このうち95は黒漆を塗布していた。石材は大半が近隣から調達した安山岩であり、郷路石も含まれる。また96・100の茶臼については畿内産の可能性も指摘されているが、詳細な産地同定は行っていない。溝はすべて8分画であり、上臼の回転方向は左回しであった。石臼はすべて1/2以下に破損していたが、民俗事例では石臼の廃棄に際して魂を抜くために故意に破却と言われている（三輪 1975）。この他石鉢・碁石が出土している。

金属製品で点数が多かったのは釘で、木質の付着を伴うものも存在する。また北宋銭である皇宋通寶1点が下層焼土層から出土した。小銅仏については全長10cm程度と非常に小形で、中実の鋳銅仏である。小銅仏に付着していた炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀前半という結果が出ている。全体の形状は如来形で、左手が刀印を結ぶという特徴を有しており、善光寺式阿弥陀如来であることは確実である。小形であるため、念持仏として所持されたものと推測される。長野県内での小銅仏出土例は茅野市干沢城跡・八幡坂遺跡、須坂市井上氏館跡があるが、念持仏としては類例がない。念持仏とは身近に置き、信心するための仏像であり、戦時には軍装束として身に付けるものである。このほか銅輪が出土しており、仏教系の遺物と考えられる。雲母片が小銅仏出土地点周辺において下層焼土層・下層包含層中より出土した。肉眼鑑定により、北安曇郡小谷村産の雲母であるとされた。福井県一乗谷朝倉氏遺跡においても雲母片が出土しており、間香札・香炉などの遺物とともに香に使用される銀葉の可能性が指摘されている。銀葉は雲母の薄片で、その上に香木の小片を載せて灰の上に置いて香を焚くものである。今回出土した雲母の用途は不明であるが、香炉などが出土していることと合わせ、銀葉の原料である可能性が考えられる。

遺物全体の特徴として、造成土層より下層は被熟した遺物が非常に多く、下層遺構出土遺物と造成土層出土遺物の接合率は高い。また日用雑器が少なく、嬌奢品・威信財が多い傾向が看取される。県内の城館遺跡では内耳鍋や片口鉢などが出土する例が多いが、本調査ではそれらのごく小片でしかみられない。平成2年度調査に関する報告書においては土器皿の他の陶磁器・土器に対する出土量の優越が述べられている。しかし本調査においてはそのような傾向はなく、遺構単位での土器皿大量出土という現象もなかった。他に平成2年度調査と比較して青磁香炉や盤などが出土し、播鉢や貯蔵具のごく少量に留まる一方、風炉や茶臼など共通して出土するものもある。青磁香炉や瓦質風炉、雲母片は栗田氏が茶・香を嗜んでいたことを意味しており、国人層としては高価な器物を有していたことを示している。

VI 自然化学分析

放射性炭素年代測定

柳吉田生物研究所

1. はじめに

長野市栗田城跡より検出された金銅製仏像1点に付着していた炭化物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

No.	試料データ	前処理
1	種類：炭化材 状態：dry 備考：金銅仏付着表面炭化材	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	-26.28 \pm 0.24	440 \pm 21	440 \pm 20	1436AD(68.2%)1454AD	1426AD(95.4%)1471AD

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

Ⅶ まとめ

栗田城跡の調査は今回で4地点となる。しかし城館跡として明確な遺構が発見されたのは、平成2年度について今回だけである。平成2年度と今回は調査区がほぼ隣接しているといつてよく、遺構の性格に関しても継続性が窺える。これら2地点は城館内郭でも北端に近く、堅穴建物や土坑が多く分布している。一方通常の城館主要部分に多い掘立柱建物がほとんど見られない(図4)。両者の相違点は平成2年度の場合調理具・煮炊具などの日用雑器が定量出土している点である。今回検出された段の造成と東西方向の柵列が平成2年度から続く北側と南側との土地利用区分のため設けられたと考えられる。柵列より北の遺構分布はコの字状に堅穴建物がめぐり、その中に比較的小規模の土坑やピットが無数に分布するというものである。このような遺構分布形態の例として、佐久市北一本柳遺跡が挙げられる。弥生時代後期・古墳時代後期・中世の複合遺跡で、中世の15世紀前半の集落跡が検出された。集落は南北方向の溝に区画され、2つのグループに分かれている。それぞれ漆を使用する工房と鍛冶関連の工房を内包することが出土遺物により判断されている。北東1.2kmに大井氏の居館と想定されている場所があり、報告書では大井氏の下で職人として働く人々の集落と評価されている。その遺構の展開は、規模の大きい堅穴建物がコの字状にめぐり、その中に土坑やピットの密集が見られる。栗田城跡もこれと類似してはいるが、明確な工房関連遺物は出土しておらず、使用する者が職人に限定されないのかもしれない。柵列北側の土地利用についてはさらに他地域の類例と比較検討していく必要があろう。

今回の調査の最大の成果は火災とそれに関連する造成層の発見である。そしてこの造成によって出土遺物の年代がほぼ15世紀前半までに限られるということである。貿易陶磁に関しては若干年代が上がるものもあるが、そのほかの遺物の年代はこの時期に該当する。これにより土器皿に関して15世紀前半代という年代観が与えられることとなった。資料の不足が言われる北信の土器皿の編年にとって重要な資料である。

栗田城の構造に関しても段を形成していたことと、区画により使用目的が異なる可能性が明らかになった。また過去の周辺の調査における遺物の年代は13世紀後半～15世紀前半を主とし、栗田城の初見史料より早い段階に栗田城が築かれていたと考えられる。その後15世紀前半に城館に大きな画期が訪れ、別に城館を移したか、あるいは大規模な改変が行われ、遺物が多く出土する内郭の位置が移動したために、今までの調査において15世紀前半よりも新しい遺物が見られない可能性もあるだろう。



図4 栗田城跡内郭部分発掘調査位置図

引用参考文献

- 牛山佳幸 2000『長野市誌』原始古代中世史編
- 小林計一郎 1982『栗田氏について』『信濃中世史考』吉川弘文館
- 佐久市教育委員会 2010『北一本柳遺跡Ⅲ』
- 鈴木弘太「中世「堅穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号
- 高橋慎一郎 2010『鎌倉時代の東国武士と善光寺信仰』『善光寺の中世』高志書院
- 高橋與右衛門 2003『中世の建物跡』『戦国時代の考古学』高志書院
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野市教育委員会 1993『高梨氏館跡発掘調査報告書』
- 長野県立歴史館 2009『開館15周年春季企画展 善光寺信仰 流転と遍歴の動化』
- 浪岡町史編集委員会 2004『浪岡町史』第二巻 浪岡町
- 新潟県立文書館 1994『紀要』1
- 馬場保之 2010「中世城館跡出土資料を中心とした茶道具－南信州の茶臼・茶湯釜－」『飯田市美術館研究紀要』20
- 原田和彦 2010『戦国時代の善光寺と栗田氏』『善光寺の中世』高志書院
- 広島県立歴史館 1995『茶・花・香－中世にうまれた生活文化－』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2002『越前朝倉氏・一乗谷 眼りからさめた戦国の城下町』
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 水澤幸一 2006「中世北陸の茶道具－越後出土の天目茶碗を中心にして」『中近世土器の基礎研究』XX 中近世土器研究会
- 水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- 水澤幸一 2001『新潟県北蒲原郡中条町 下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町埋蔵文化財調査報告第21集
- 水澤幸一 2004「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』No.24 貿易陶磁研究会
- 三輪茂雄 1975『石臼の謎』技術書院
- 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

第1表 遺物観察表(土器・陶磁器)

(黒・黒色緑、白・白色緑、赤・赤色緑、石・石灰、雲母、雲母片、黒片、黒片四角)

標本番号	遺物名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	残存率	色調	胎土	成形	想定産地	時期	備考
				口径	器高	底径								
1	S K 01	陶器	合子・水	1.40	0.05	—	1.20	小片	緑	淡黄色、精良	ワタロ、沈輪、灰輪	瀬戸・美濃		吉野戸
2	S K 01	土師器	皿	11.00	2.50	7.00	11.34	1/8	橙	白・赤・石・小礫	ワタロ、赤切	在池		
3	S K 01	土師器	皿	9.40	2.60	—	9.19	1/8	灰黄	白・赤・石・小礫	ワタロ	在池		口縁内面スス付着
4	S K 01	土師器	皿	9.00	2.50	4.60	12.53	1/8	灰白	白・赤・長	ワタロ、赤切	在池		
5	S K 02	土師器	皿	8.30	2.30	4.80	61.78	定形	橙	白・赤・雲・石・長	ワタロ、赤切	在池		
6	S K 03	土師器	皿	—	2.60	4.00	51.04	底部1/2	橙	白・赤・雲・石・内	ワタロ、赤切	在池		
7	S K 03	土師器	皿	7.00	2.00	4.20	30.20	1/2	にぶい・黄橙	白・赤・石・長	ワタロ、赤切	在池		
8	S K 03	土師器	皿	7.80	2.00	3.20	17.71	1/4	にぶい・橙	白・赤・石・長	ワタロ	在池		
9	S K 03	土師器	皿	7.00	1.60	4.20	13.77	1/8	にぶい・黄橙	白・赤・石・内	ワタロ、赤切	在池		
10	S K 03	土師器	皿	—	0.230	8.20	731.30	1/8	にぶい・黄橙	白・赤・雲・石	ワタロ、赤切	在池		
11	S K 03	土師器	皿	—	0.300	—	30.10	1/8	にぶい・黄橙	白・赤・石・内	ワタロ、赤切	在池		
12	S K 05	土師器	皿	8.40	1.80	5.00	10.19	底部3/4	にぶい・橙	白・赤・石・小礫	ワタロ、赤切	在池		
13	S K 06	青磁	湯呑文様	—	0.110	5.40	102.66	底部2/3	明緑灰	灰白色、精良	ワタロ、高台内中央部隆起部動	龍泉窯系	13C 前	藤田・森田 Ⅰ
14	S K 06	青磁	碗	—	0.900	—	22.45	口縁一部	淡緑	灰白色、精良	ワタロ	龍泉窯系	14C 初～15C 前	藤田・森田 Ⅱ
15	S K 06	土師器	皿	9.60	3.05	5.00	59.37	2/3	橙	白・赤・雲・石・小礫	ワタロ、赤切	在池		口縁内面スス付着、薄手
16	S K 06	土師器	皿	9.60	2.80	5.00	29.92	1/4	にぶい・橙	白・赤・雲・石・長	ワタロ	在池		薄手、薄子
17	S K 06	土師器	皿	—	0.700	4.60	23.30	底部1/2	にぶい・橙	白・赤・石	ワタロ、赤切	在池		
18	S K 07	青磁	碗	16.00	6.60	5.40	246.74	2/3	ナリーブ灰	灰色、精良	ワタロ、側面高台、見込部隆、斜紋文	龍泉窯系	14C 初～15C 前	藤田・森田 Ⅲ、見込部隆、斜紋文
19	S K 07	青磁	碗	16.00	6.00	—	88.00	口縁1/3	ナリーブ灰	灰白色、精良	ワタロ	龍泉窯系	14C 初～15C 前	藤田・森田 Ⅲ
20	S K 07	白磁	皿	7.80	3.60	3.00	21.15	1/4	灰白	陶胎、灰白色、精良	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	中国	15C	森田 Ⅳ 型 J37 と類似
21	S K 07	白磁	皿	7.40	3.55	3.20	28.54	1/5	灰白	陶胎、灰黄色、精良	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	中国	15C	森田 Ⅳ 型
22	S K 07	白磁	皿	8.20	3.50	6.00	59.55	1/2	灰白	陶胎、灰黄色、精良	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	中国	15C	森田 Ⅳ 型
23	S K 07	白磁	皿	7.40	3.25	3.00	22.78	1/6	灰白	陶胎、灰白色、精良	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	中国	15C	森田 Ⅳ 型、見込部隆
24	S K 07	白磁	皿	8.00	2.70	—	33.41	口縁3/4	灰白	陶胎、にぶい・黄橙色、精良	ワタロ、後面下部ワタロ削り、外面体部下平隆動	中国	14C	森田 Ⅳ 型
25	S K 07	白磁	皿	7.80	2.60	—	13.21	口縁1/4	灰白	陶胎、灰白色、精良、空染	ワタロ	中国	15C	森田 Ⅳ 型
26	S K 07	陶器	天目碗	11.20	5.20	4.40	143.51	1/3	黒	灰色、精良、空染	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	中国	14C 後～15C 前	
27	S K 07	陶器	浅碗	12.00	0.20	—	59.00	口縁1/3	黒	灰白色、精良	ワタロ、側面高台、外面体部下平高台形隆動	瀬戸・美濃	15C 前	吉野戸後Ⅱ、焼熟
28	S K 07	陶器	仏具鉢	縦 8.8 横 8.0	0.80	—	72.19	1/6	黒緑	黄灰色、精良	ワタロ	瀬戸・美濃	15C 前～中	吉野戸古
29	S K 07	陶器	飯子目鉢	—	0.330	—	304.57	1/12	灰ナリーブ	灰白色、精良	胎土細輪隆、外面ワタロ、平行式隆、内面節部凹、ナブ	瀬戸・美濃	14C 後～15C 前	吉野戸後Ⅰ・Ⅱ
30	S K 07	土師器	皿	9.40	2.70	5.40	37.89	口縁1/3	橙	白・赤・雲・石・長	ワタロ、赤切	在池		
31	S K 07	土師器	皿	8.00	1.50	5.20	23.20	1/2	にぶい・黄橙	白・赤・長	ワタロ、赤切	在池		内面焼熟
32	S K 07	土師器	皿	21.00	0.40	—	70.08	口縁1/3	灰白	赤・石、精良	手づくね	不明		志摩個人品、口縁外面未染
33	S K 10	山系統	小皿	6.90	1.90	3.20	13.67	1/6	灰白	精良	ワタロ、赤切	尾張	13C 後～14C 前	尾張型第 8 型式
34	S K 11	陶器	合子身	5.00	0.80	—	2.62	小片	灰ナリーブ	灰色、精良	ワタロ	瀬戸・美濃	14C 後～15C 前	吉野戸後Ⅰ・Ⅱ
35	S K 11	瓦器	風炉	—	—	—	8.88	小片	橙	白・石・陶	スタンプ文	不明		
36	SA01 P53	土師器	皿	8.00	1.80	6.00	12.88	1/6	にぶい・黄橙	白・赤・小礫	ワタロ、赤切	在池		15C 前
37	ST01 P51	陶器	皿	13.00	7.50	—	53.19	小片	黒緑	灰色、精良	ワタロ、口縁部隆、高し、節輪、鉄輪隆、一面節部動	中国		同一片多
38	ST01 P72	青磁	碗	—	0.300	6.60	35.00	底部1/6	灰ナリーブ	陶胎、灰色	ワタロ	龍泉窯系	14C 初～15C 前	藤田・森田 Ⅲ
39	P52	陶器	皿	18.00	01.90	—	205.88		灰	白・黒・石・空染	輪胎、外面平手行隆、体部内面当目隆、ナブ	兵庫	14C 後～15C 前	吉野戸・Ⅴ 期
40	P52	土師器	皿	6.60	1.70	4.20	29.02	2/3	橙	白・赤・雲・石	ワタロ、赤切	在池		
41	P52	土師器	皿	6.70	2.10	4.00	30.44	1/2	橙	白・赤・雲・石	ワタロ、赤切	在池		
42	P52	土師器	皿	—	2.70	6.80	36.98	底部定形	にぶい・橙	白・赤・雲・石・小礫	ワタロ、赤切	在池		
43	P70	青磁	香炉	—	—	—	14.85	小片	青緑	灰白、精良	ワタロ、尊本文、内面隆動	龍泉窯系	13C 後～14C 前	

(黒一黒色、白一白色、赤一赤色、石一石、雲一雲、長一長石、角一角)

標本 番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	残存率	色調	胎土	成形	想定産地	時期	備 考
				口径	器高	底径								
44	P70	瓦器	風炉	—	63.30	—	8341	小片	橙	白・赤・石・長・角	腹部内縁・スタン プ文	不明	15C	風炉1型
45	下層区 含む	土師器	瓶	12.40	290	8.60	2500	1/8	浅黄橙	白・赤・雲・石・ 長・小礫	口ナド	在地		
46	上層区 含む	土師器	瓶	—	1.50	6.00	2254	底部1/3	浅黄橙	赤・石・精瓦	口ナド、ナズリ・赤 雲	在地		
47	上層区 土師	土師器	瓶	10.00	290	4.80	6796	口縁一部 欠損	橙	白・赤・雲・石・ 長	口ナド、赤切	在地		
48	上層区 土師	土師器	瓶	15.00	0.80	—	460	小片	灰白	赤・精瓦		不明		
49	1次検 出前	青磁	甗	22.00	5.30	3.80	8932	1/6	オリーブ灰	磁胎、灰白色、 精瓦	口ナド、番筒底	龍泉窯系	15C 前	高台内トナ
50	1次検 出前	白磁	瓶	11.60	0.09	—	768	口縁1/8	白 (透明)	磁胎、灰白色、 精瓦	口ナド	中国	13C 前～ 14C 前	下部、口内裏
51	1次検 出前	青白磁	瓶	—	—	—	4977	小片	明緑灰	磁胎、灰白色、 精瓦	口ナド、漢文	中国		瓶
52	1次検 出前	陶器	香炉	—	0.10	7.60	3610	1/8	黒	灰白色、精瓦				
53	1次検 出前	土師器	瓶	6.80	1.80	3.60	2042	1/4	にぶい黄橙	赤・石	口ナド、赤切	在地		口縁付蓋スズ、全体 に黒色焼成
54	1次検 出前	土師器	瓶	7.20	1.60	5.20	3275	3/4	橙	白・赤・雲・石・ 小礫	口ナド、赤切	在地		
55	1次検 出前	土師器	瓶	9.40	2.10	5.40	7300	3/4	にぶい橙	白・赤・雲・石・ 小礫	口ナド、赤切	在地		厚肌しい
56	1次検 出前	土師器	瓶	10.40	3.00	5.00	7070	2/3	橙	白・赤・石	口ナド、赤切	在地		
57	1次検 出前	土師器	瓶	—	0.60	6.80	3247	底部4/5	にぶい黄橙	白・赤・石・ 精瓦	口ナド、赤切	在地		
58	下層区 土師	青磁	甗	—	0.08	8.00	3389	底部1/8	オリーブ灰	磁胎、灰白色、 精瓦	口ナド、見込中央 印文、高台内縁 滑文、足付滑文	龍泉窯系	14C 前～ 15C 前	横田・森田製イ
59	下層区 土師	青磁	香炉	—	0.08	15.00	6216	小片	青緑	磁胎、灰白色、 精瓦	口ナド、胎文牡丹 滑文	龍泉窯系	14C	SD01・P 52・P 60 女士に同一片
60	下層区 土師	陶器	平鏡	23.00	0.50	—	3375	小片	灰オリーブ	灰白色、精瓦	口ナド	瀬戸・美濃	15 世紀前 ～17	瀬戸後古
61	下層区 土師	陶器	水注	6.60	0.80	—	1075	小片	黒	灰白色、精瓦	口ナド	瀬戸・美濃	14C 中	瀬戸中 Ⅱ
62	下層区 土師	陶器	花瓶	—	0.50	6.60	9132	1/8	オリーブ黄	灰白色	口ナド、赤切、番筒 印文、胎・底 部付合内、内底、 下部手一底部外 面滑文	瀬戸・美濃	15C 前	瀬戸後古Ⅱ、瓶熱 により黄色
63	下層区 土師	土師器	瓶	14.00	0.08	—	587	小片	灰白	赤・精瓦	手づくね	在地		
64	下層区 土師	土師器	瓶	8.00	1.80	4.80	1097	1/6	にぶい黄橙	白・赤・石	口ナド	在地		
65	下層区 土師	瓦器	風炉*	24.00	0.80	—	3101	小片	にぶい黒	白・赤・石・長・ 角	スタンプ文	不明	15C	風炉1型*
66	下層区 含む	青磁	鉢*	24.00	0.60	—	10420	小片	オリーブ灰	磁胎、灰白色、 黒色粒、精瓦		龍泉窯系		瓶熱
67	下層区 含む	青磁	香炉*	21.00	0.10	—	2947	小片	オリーブ灰	磁胎、灰白色、 黒色粒、精瓦	流線、胎文	龍泉窯系	14C	瓶熱
68	下層区 含む	白磁	瓶	—	0.30	4.00	1925	底部片	灰白	陶胎、灰黄色、 精瓦	口ナド、頸高台 高の滑文	中国	15C	高台内朱書「一」
69	下層区 含む	陶器	藍緑大 甗*	24.00	0.08	—	3095	小片	灰オリーブ	灰白色、精瓦	口ナド、口縁上縁 流線、底部下縁 滑文	瀬戸・美濃	14C 後～ 15C 前	瀬戸後Ⅱ
70	下層区 含む	陶器	袴懸香炉	—	0.80	9.80	15295	底部1/2	灰白	灰白色、精瓦	口ナド、口ナド ナズリ、口切、脚貼 付3単位	瀬戸・美濃	15C 前	瀬戸後Ⅲ
71	下層区 含む	陶器	袴懸香炉	—	0.90	5.30	3550	底部1/2	灰オリーブ	灰白色、精瓦	口ナド、赤切、脚貼 付3単位	瀬戸・美濃	15 世紀前 ～17	瀬戸後Ⅲ古
72	下層区 含む	山茶碗	小皿	—	0.90	5.60	1097	底部1/4	浅黄	浅黄色、精瓦	口ナド、赤切	不明	14C 後～ 15C 前	
73	下層区 含む	土師器	瓶	7.10	1.80	4.70	1809	1/4	橙	白・赤・雲・石・ 長	口ナド、赤切	在地		
74	下層区 含む	土師器	瓶	7.20	1.80	5.40	1379	1/6	橙	白・赤・雲・ 石	口ナド、赤切	在地		
75	下層区 含む	土師器	瓶	7.00	1.60	4.40	2343	1/4	橙	白・赤・雲・石・ 長	口ナド、赤切	在地		
76	下層区 含む	土師器	瓶	7.60	1.90	4.80	1658	1/4	橙	白・赤・雲	口ナド、赤切	在地		
77	下層区 含む	土師器	瓶	9.20	2.80	5.40	2002	1/4	橙	白・赤・雲・ 長	口ナド、赤切	在地		
78	下層区 含む	土師器	瓶	11.40	2.40	7.40	2377	1/4	にぶい橙	白・黒・石	手づくね、底部 胎土粒状、内面 アタテ	在地		内面スズ付着
79	下層区 含む	土師器	瓶	10.20	2.40	5.50	6852	3/4	にぶい黄橙	白・赤・石・ 長	口ナド、赤切	在地		底部外面粘土剥離
80	下層区 含む	瓦器	風炉*	—	—	—	29562	小片	橙	灰黄色、白・赤・ 石・長・角・ 小礫	腹部内縁2条、靴 状器	不明	15C	内面黒色、風炉脚部
81	下層区 含む	青磁	甗	16.00	0.60	—	4908	口縁1/8	灰オリーブ	磁胎、灰白色、 精瓦		龍泉窯系	14C 前～ 15C 前	青磁、瓶熱
82	下層区 含む	青磁	甗	—	0.55	—	940	口縁1/8	オリーブ灰	磁胎、灰白色、 精瓦		龍泉窯系	14C 前～ 15C 前	青磁、瓶熱
83	1次検 出前	白磁	瓶	10.00	0.90	—	1119	口縁1/5	灰白	陶胎、灰白色	口ナド、修部下手 裏面	中国	15C	森田D型
84	1次検 出前	白磁	瓶	9.20	0.70	—	1206	口縁1/4	灰白	陶胎、灰白色	口ナド、口ナドナ ズリ、修部下手裏 面	中国	15C	森田D型、瓶熱

(黒一黒色粒、白一白色粒、赤一赤色粒、石一石丸、雲一雲粒、灰一灰石、角一角四石)

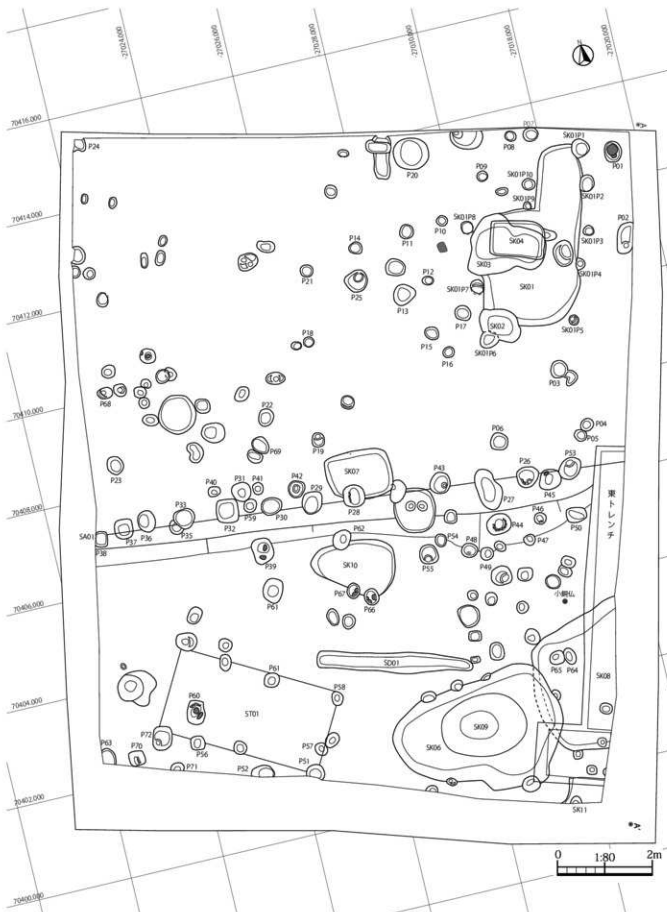
標本 番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	残存率	色調	胎土	成形	測定産地	時期	備 考
				口径	器高	底径								
86	2次検出前	陶器	壺*	8.60	11.90	—	7.75	小片	黒サリーツ	オリーブ褐色 粘土	ロタロ	鹿戸・美濃		古瀬戸
87	2次検出前	土師器	皿	10.00	2.80	6.20	24.03	1/6	橙	白・赤・石・ 黒炭	ロタロ・糸切	在産		
88	2次検出前	土師器	皿	8.00	1.80	6.20	13.55	1/4	橙	白・赤・雲・石・ 小礫	ロタロ・糸切	在産		
89	2次検出前	土師器	皿	10.00	2.30	7.20	17.06	1/6	にぶい橙	白・赤・石	ロタロ・糸切	在産		
90	2次検出前	土師器	皿	10.00	2.50	6.40	14.41	1/5	にぶい赤	白・赤・雲・石・ 粘土	ロタロ・糸切	在産		
91	2次検出前	瓦器	風印	—	—	—	30.98	小片	にぶい黄橙	白・赤・石・角 礫	熊野蓮子文・鎌倉文	不明	15C	風印瓦型
92	調査区	陶器	片口鉢	30.60	19.10	—	301.09		灰	黒・海綿骨粒・ 小礫	ロタロ、跡目1草 位20本	珠洲	13 C 後 - 14 C 初	古園第1期、大跡

第2表 遺物観察表(石製品・金属製品)

石臼(A・外径B・器高C・中心高)石鉢(A1・径B1・器高C1・底径)金属製品(A:長さ、B:幅、C:厚さ)

番号	遺物名	種類	分類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	残存率	備 考
					A	B	C			
93	S K 06	石製品	石鉢	安山岩	27.00	12.00	18.00	2340.00	1/4	口縁部・内面平滑
94	S K 06	石製品	石臼	安山岩(輝石石)	31.20	11.40	7.20	5,050.00	1/4	粉挽臼、上臼8分割
95	S K 07	石製品	石臼	安山岩(輝石石)	17.40	12.30	11.10	2,000.00	1/4	基臼、上臼8分割、上面・把手孔厚薄不均、後面外周平滑
96	S K 07	石製品	石臼	安山岩(輝石石) 可塑性	35.10	(4.80)	—	1,620.00	受取部	基臼、下臼受取部
97	S K 07	石製品	砥石	蛇紋岩	50	22	23	6,000	定形	稜形
98	1次検出面	石製品	石臼	安山岩	18.60	12.30	10.80	3,950.00	3/4	基臼、上臼8分割、把手左右2小溝、視面中心付及器底
99	下層地土層	石製品	石臼	安山岩	31.20	12.00	7.80	10,500.00	3/4	粉挽臼、上臼8分割、一部溝磨滅、後面全体に粉痕
100	下層包含層	石製品	石臼	安山岩	21.00	(12.30)	10.80	2,600.00	1/3	基臼、上臼8分割
101	下層包含層	石製品	石臼	安山岩	29.10	12.00	8.40	4,300.00	1/4	粉挽臼、上臼8分割
102	下層包含層	石製品	石臼	安山岩、器内の 可塑性	—	(10.20)	—	1,100.00	中心部分小片	基臼
103	下層包含層	石製品	石鉢	安山岩	31.80	12.00	—	1,180.00	口縁1/8	内面下半平滑
104	下層包含層	石製品	石鉢	安山岩	21.00	11.70	13.80	1,180.00	1/5	
105	調査区	石製品	石臼	安山岩	31.80	10.20	8.10	4,500.00	1/3	粉挽臼、下臼8分割
106	調査区	石製品	基石		径1.6	厚5.03		1.80	定形	黑色
107	S K 01P6	金属製品	釘		3.60	0.30	—	275	定形	
108	S K 01P6	金属製品	釘		3.60	0.60	—	443	定形	
109	S K 03	金属製品	釘		(2.60)	0.85	—	399		
110	S K 04	金属製品	釘		5.00	0.60	—	639	定形	
111	S K 05	金属製品	釘		(3.70)	1.00	—	542		
112	S K 07	金属製品	釘		4.40	0.60	—	391	定形	
113	S K 08	金属製品	釘		5.20	0.75	—	829	定形	
114	S K 10	金属製品	不明		4.00	0.55	—	251		
115	ST01P8	金属製品	釘		7.00	0.60	—	1,187	定形	
116	SD01	金属製品	釘		4.00	0.75	—	338	定形	
117	P24	金属製品	釘		3.10	0.60	—	225	定形	
118	P50	金属製品	釘		(4.00)	0.90	—	675	先端欠損	中段に木片付着
119	上層包含層	金属製品	釘		(3.00)	0.50	—	333	先端欠損	
120	上層包含層	金属製品	不明		(3.40)	0.90	—	529	先端欠損	
121	上層包含層	金属製品	不明		3.20	0.75	—	274		
122	1次検出面	金属製品	釘		3.50	0.75	—	378		
123	1次検出面	金属製品	釘		3.40	1.00	—	656		
124	1次検出面	金属製品	釘		(4.90)	1.05	—	1431	先端欠損	
125	1次検出面	金属製品	釘		(3.80)	0.65	—	298	先端欠損	
126	1次検出面	金属製品	釘		4.90	0.80	—	456		
127	1次検出面	金属製品	釘		(6.70)	0.80	—	2355	先端欠損	
128	1次検出面	金属製品	釘		(3.90)	0.70	—	446	先端欠損	
129	1次検出面	金属製品	釘		(4.80)	0.45	—	460	先端欠損	
130	1次検出面	金属製品	不明		4.30	0.45	—	385		
131	1次検出面	金属製品	不明		(4.20)	0.65	—	589	先端欠損	
132	下層地土層	金属製品	小銅貨		10.50	2.90	1.70	286.19	定形	阿蘇院如來、月印、蓮台座
133	下層地土層	金属製品	銅塊		16.80	(3.90)	—	376	小片	
134	下層地土層	金属製品	釘		(3.20)	0.75	—	332	先端欠損	
135	下層地土層	金属製品	釘		(2.90)	0.75	—	350	先端欠損	木片付着
136	下層地土層	金属製品	釘		(2.80)	1.70	0.70	234	両端欠損	木片付着
137	下層地土層	金属製品	釘		(6.80)	0.55	—	2312	先端欠損	
138	下層地土層	金属製品	釘		(4.60)	0.75	—	752	先端欠損	

報告 番号	通稱名	種類	分類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	残存率	備 考
					A	B	C			
139	下層地土層	金属製品	釘		0.60	1.10	0.75	7.18	先端欠損	木片付着
140	下層込合層	金属製品	不明		0.30	1.20	—	10.89	先端欠損	
141	上層地土層	金属製品	鍍貨		2.40	内径 0.6	0.10	3.33	完整	「京宋通寶」、無背、北宋 1038 年鑄、銀書
142	2 次検出面	金属製品	釘		4.30	0.65	—	5.23		
143	2 次検出面	金属製品	釘		0.00	0.50	—	3.82	断面欠損	
144	2 次検出面	金属製品	釘		0.50	0.60	—	9.55	先端欠損	
145	2 次検出面	金属製品	釘		4.20	0.60	—	3.95		
146	調査区	金属製品	不明		8.90	断面幅 2.0	下部幅 0.5	21.78		
147	調査区	金属製品	不明		3.90	1.35	—	8.83		
	下層地土層	雑物	雲母片					1.35		SK08 付近下層地土層より出土



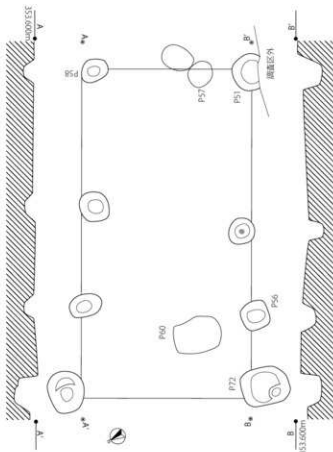
東横セクション

355.500m
A
K

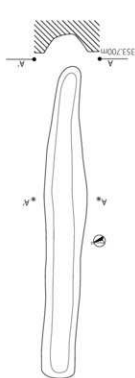


1. 遺構土、礫・砂、
2. 砂土、
3. 砂土、
4. 埋立土、
5. 埋立土、
6. 埋立土、
7. 埋立土、
8. 埋立土、
9. 埋立土、
10. 埋立土、
11. 埋立土、
12. 埋立土、
13. 埋立土、
14. 埋立土、
15. 埋立土、
16. 埋立土、
17. 埋立土、
18. 埋立土、
19. 埋立土、
20. 埋立土、
21. 埋立土

ST01

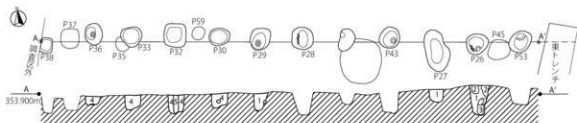


S001



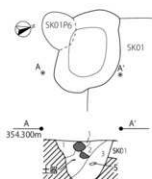
0 1.80m(東壁) 2m 0 1:40(その他) 1m

SA01



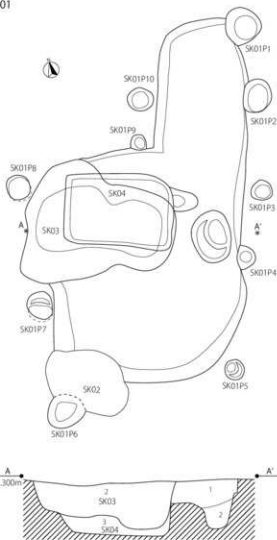
1. 灰褐色シルト 炭化物・橙色粒。
2. 黄褐色シルト 地山ブロック多量、炭化物・橙色粒。
3. 黒色シルト 柱礎、しまりなし、橙色粒。
4. 青灰粘土ブロック、炭化物・橙色粒。
5. 黒色シルト 柱礎、しまりなし、炭化物・橙色粒、青灰粘土ブロック。

SK02



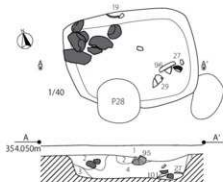
1. 黄褐色粘土 炭化粒少量、橙色粒ごく少量。
2. 黒褐色粘土 炭化物少量、1層土底。
3. 黄褐色粘土

SK01

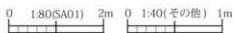


1. 暗灰黄色シルト質粘土 地山ブロック・炭化物中量。
2. 黒褐色シルト質粘土 橙色粒・炭化物中量、地山土少。
3. 暗灰色シルト質粘土 地山ブロック・橙色粒・炭化物。

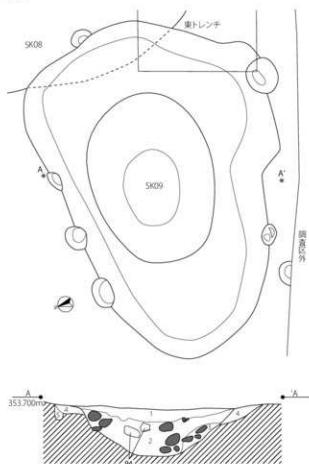
SK07



1. 暗灰黄色シルト質粘土 1次面形成土。
2. 暗灰黄色シルト質粘土 炭化物。
3. 灰赤色粘土 焼成により熟した遺構壁。
4. 暗灰色粘質シルト しまりなし、炭化材・粘土粒多量、遺物多量。

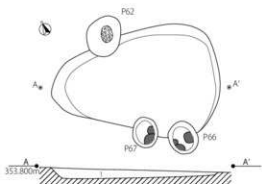


SK06



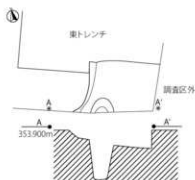
1. 灰黄色砂質シルト モザイク状ブロック・橙色粒・炭化粒少量。SK09。
2. 灰黄褐色粘土 橙色粒・炭化物中量。糠多量。石屑・漆屑。SK09。
3. 褐色砂質土 SK09。
4. 灰黄褐色粘土 橙色粒・炭化物中量。
5. 灰黄褐色粘土 柱穴。橙色粒・炭化物中量。

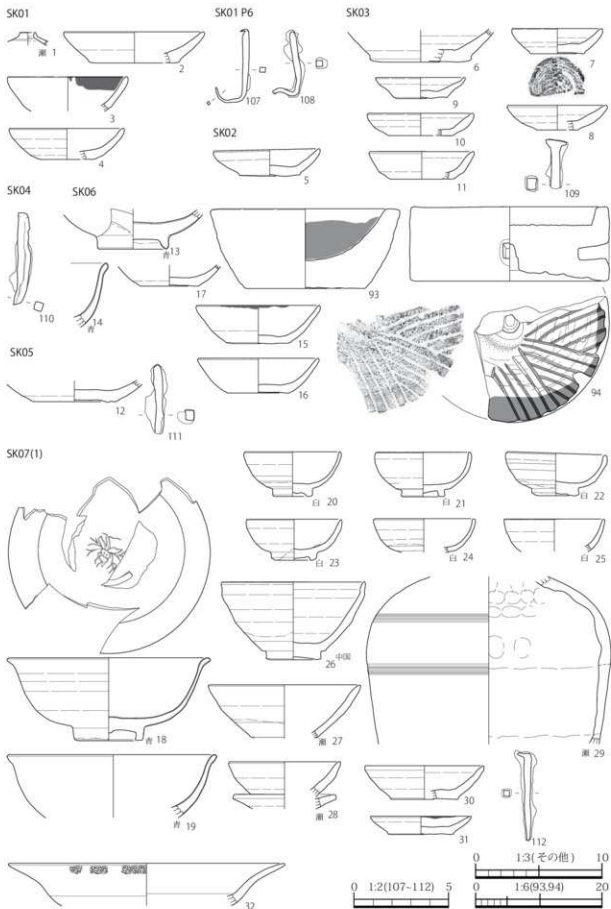
SK10

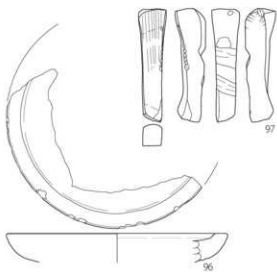
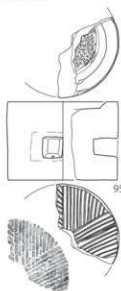


1. 灰黄褐色シルト 炭化物・橙色粒。

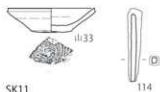
SK11







SK10

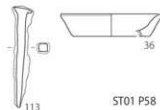


SK11



SK08

SA01 P33



ST01 P51



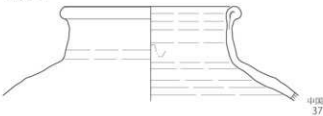
SD01



P24



P50

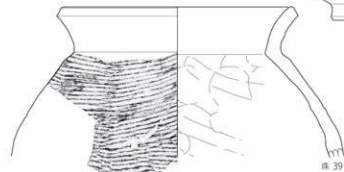


ST01 P72

ST01 P58



P52

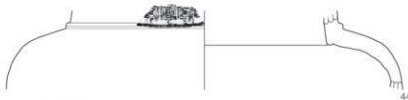


40

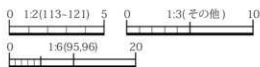
41

42

P70



43



上層包含層



45



119

120

121

上層礫層

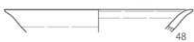


46

上層焼土層

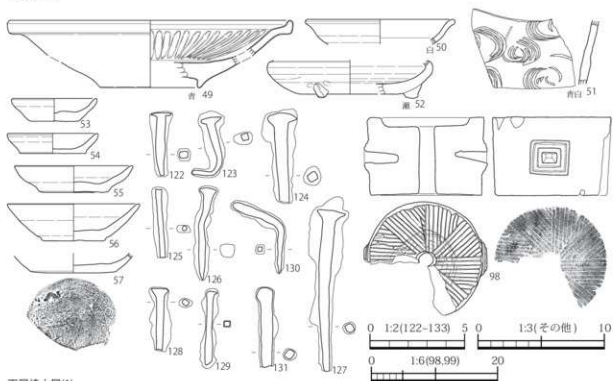


47

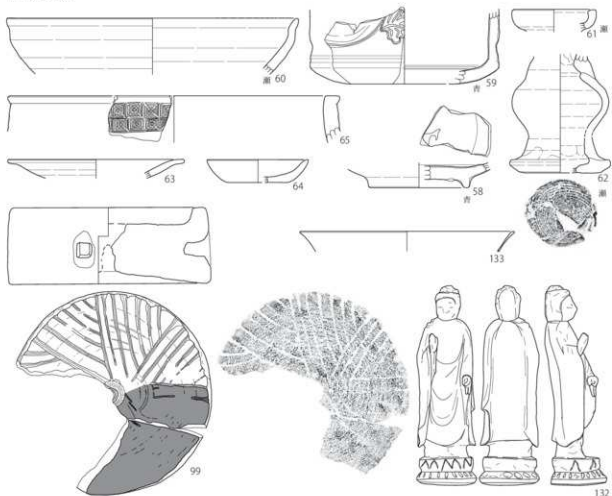


48

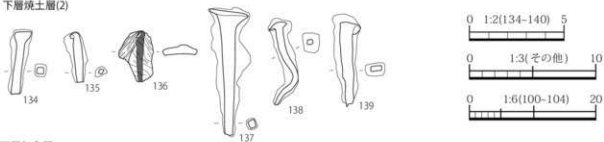
1次検出面



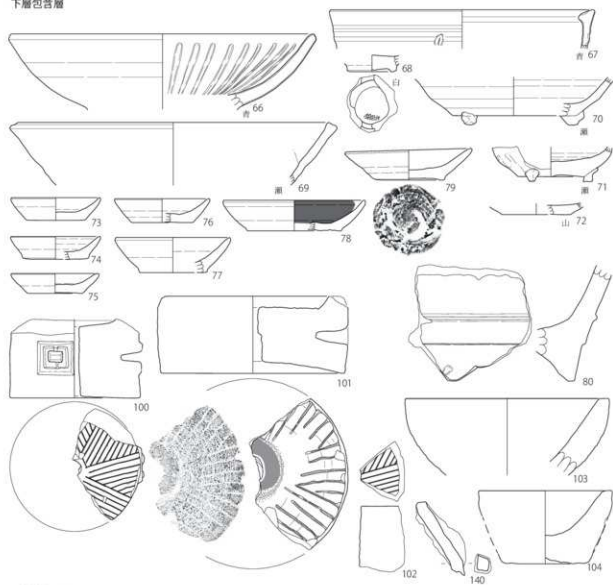
下層焼土層(1)



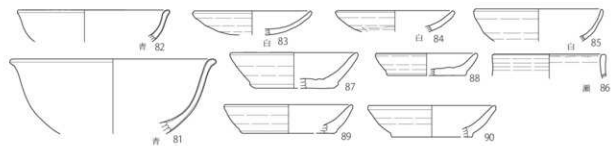
下層焼土層(2)



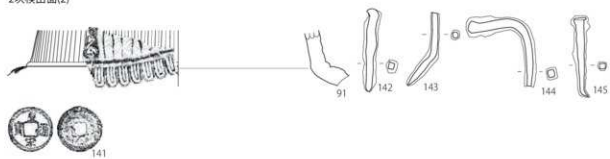
下層包含層



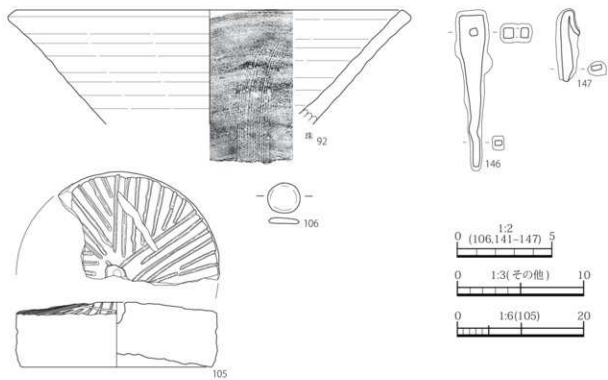
2次検出面(1)



2次検出面(2)



調査区





道跡1次面全景(北から)



調査区南半全景(西から)



調査区東壁北半断面(西から)



調査区東壁南半断面(南西から)



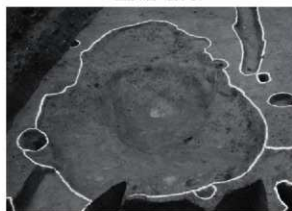
調査区南壁断面(北東から)



SK01 完掘状況 (北から)



SK06 土層断面 (西から)



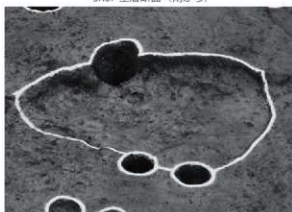
SK06 完掘状況 (東から)



SK07 土層断面 (南から)



SK07 完掘状況 (南から)



SK10 完掘状況 (南から)



SK11 完掘状況 (北西から)



SK08 完掘状況 (東から)



P01 完掘状況 (東から)



SA01 P28 土層断面 (西から)



SA01 P32 土層断面 (南から)



P52 完掘状況 (北から)



P62 土層断面 (南から)



ST01 P72 土層断面 (北から)



小銅仏出土状況

SK01



SK01 P06



SK03



SK04



SK06



SK07(1)



SK05



SK07(2)



SK08



SK10



SK11



SA01 P33



SD01



P24



P50



P52



ST01 P72



ST01 P58



ST01 P51



P70



上層包含層



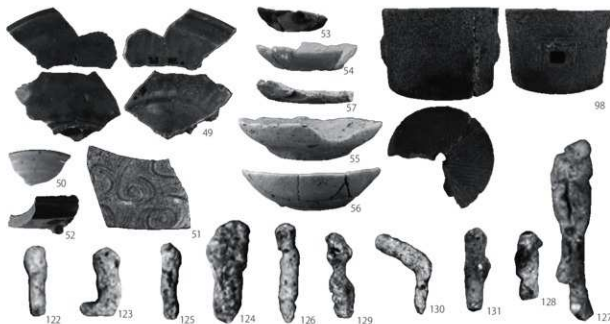
上層礫層



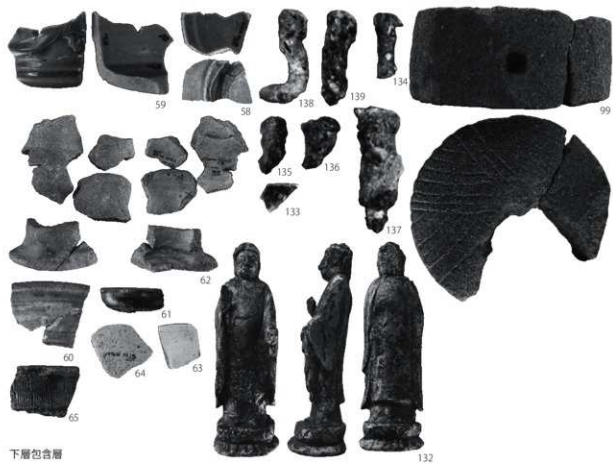
上層焼土層



1次検出面



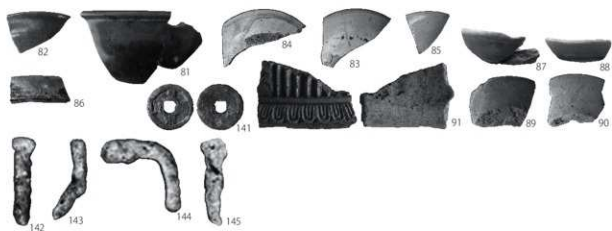
下層焼土層



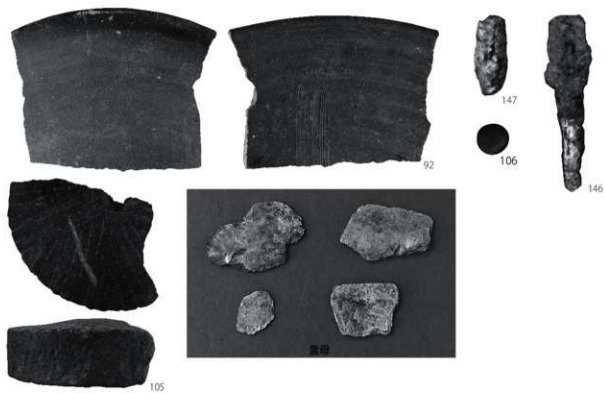
下層包含層



2次検出面



調査区



報告書抄録

ふりがな	下さばながわせんじょうちいせきぐん くりたじょうあと							
書名	裾花川扇状地遺跡群 栗田城跡 (4)							
副書名	栗田ふれあい会館建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第133集							
編著者名	飯島哲也 田中曉徳							
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2014(平成26)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
裾花川扇状地 遺跡群 栗田城跡	長野県長野 市栗田480 番地2	20201	B-204	36° 38' 14"	138° 11' 40"	2013.5.30 ～ 2013.6.24	190㎡	公民館建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
裾花川扇状地 遺跡群 栗田城跡	城館	中世	堅穴建物4・掘立柱建物1・ 欄列・土坑7・溝1・ピット		陶磁器(国産・輸入)・土器皿・石臼・ 石鉢・金属製品・ 小銅仏		中世の小銅仏(念持仏) の出土	
要約	中世城館とされる栗田城跡の主郭部分に段が形成されていたことが確認された。焼土層からは15世紀前半までの遺物が出土し、罹災時期を示している。小銅仏は焼土層より出土し、同様に15世紀前半のものと推測される。遺物の構成からは茶・香を嗜む国人の生活が復元され、貴重な調査事例となった。							

長野市の埋蔵文化財第133集

裾花川扇状地遺跡群

栗田城跡 (4)

平成26年3月31日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 大日本法令印刷株式会社